

韓国の高校生及び保護者の性役割意識

—日本語教科書の分析の検証—

平木 孝典

倉敷芸術科学大学 インターナショナルセンター

(2011年10月1日 受理)

1 はじめに

「家族はいわば、政治社会の最初のモデルである」J・J・ルソーは『社会契約論』（1954：16）の中で、支配者とする親に対しした人民とする子供が、親の存在を必要としなくなると、その両者の結びつきが解けるところから、家族も約束によってのみ維持されると説く。それから250年程経った現代にあっては、そのような約束が「家庭崩壊」⁽¹⁾の憂き目に遭う世相になり、ますます家庭教育のあり方が重要視されてきた。日本では2007年12月に教育基本法（以下、教基法と記す）が一部改訂されたが、その一つに「第10条、家庭教育」及び「第13条、学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」の新設がある。この主旨は、保護者に家庭での教育の重要性を自覚させることを狙い、国や自治体には振興義務を設けている点であるが、その成立の背景としては児童、生徒の登校拒否や引き籠もりなどがある⁽²⁾。こうした改訂に関して、「『学力の向上』を大義名分にして学校教育に家庭・家庭教育が従属される」（井上、2008：148）という指摘があるものの、家庭はプライバシーの領域とは言ってられない日本の現在の家庭を取り巻く状況があり、改訂前教基法が制定された1947年以降とは大きく変貌を遂げていることが大きな要因と考えられる。

一方、韓国の教基法での「家庭教育」に関しては、「第13条、保護者」において保護者の「子への責任」を明記しているが、それへの施策として、日本では国、自治体から保護者への教育的支援策を打ち出し、韓国では保護者から教育行政への働きかけを奨励している。つまり日本の「上から下」に対し、韓国では保護者と学校、教員との連携を図る「下から上」への働きかけとなっている。これは第一義的には保護者自身の様々な意見を「上」に持ち上げる主体的な自立性が求められるため、逆に保護者が「沈黙」しては教育に反映されない恐れがある。つまり家庭教育に戻せば、韓国では基本的に子への家庭でやるべき事柄は、保護者に任せられている模様である。

教基法での高校生の本分は言うまでもなく所定の学習であり、家庭での掃除、洗濯、料理などはまさしく家庭の領域内であるが、韓国の高校教科書『市民倫理』には、「家庭では夫と妻の時間が同等な価値を持つという認識を土台に、男も喜んで家事を分担しなければならない」⁽³⁾（市民倫理、2009：109）とする記述がある。これは1996年12月に制定された「女性発展基本法」において、「個人の尊厳を基礎として男女平等の促進、母性の

保護、性差別的意識の解消および女性の能力開発を通じて、健康な家庭の実現と国家および社会の発展に男女が共同で参加して責任を分担することができるようにすること」とする基本理念が背景にあるものと考ええる。

このように韓国の学校教育では「両性平等」を説き、家事分担に性差を持ち込まない指導がされているが、韓国教育部(1998:v)の「学校内性差別実態調査及び男女平等意識鼓舞方案」という報告書には、「学校教育が男女平等に成し遂げられているとは限らず、伝統的な性の役割という固定観念をパターンとして、性差別的教育活動が行われ、特に高校が最も性差別的である」⁽⁴⁾という結論を導き出している。遅れること2007年5月に教育人的資源部は初等学校⁽⁵⁾の教科書の中の男女平等に反する挿絵について、「家事は全て女性がしなければならないという考えを子供たちに植え付ける可能性があるため、修正することにした」⁽⁶⁾と説明し、教科書の一斉点検、修正が始まった。しかしこれは初等学校でのことであり、高校までには及んでいない。

そこで本稿は先に、こうした韓国政府の教育施策を検証する一環として、平木(2009)が韓国の高校日本語教科書の第6次(適用96年)と第7次(適用02年)の計24冊に見られる、男女の家庭及び社会での性役割分担の描かれ方について、ジェンダー・フリーの観点から考察した。その結果、第6次から第7次に至り、「男は仕事、女は家事」という典型的な夫婦の役割分担は依然としてステレオタイプ化しているが、家庭内での娘については大きな変化はなかったものの、息子の家事分担についてはその記述及び描写が大幅に増え、男子高校生の意識改善の方向性が窺えた。しかしこれはあくまでも日本語教科書に表わされた限られた範囲での分析である。

本稿は、このような韓国の高校日本語教科書に見られる男女の性役割分担の描かれ方の分析結果を実際に検証するため、高校生及び保護者に対する設問調査から、家庭での性役割意識についての実態の解明を目的とする。

2 先行研究

政策的な観点から「男女平等」に言及したものには白井(白井, 2006: 50-69)の「韓国の女性関連法制-男女平等の実現に向けて」がある。ここでは1997年12月に出された第一次女性政策基本計画に関わり、「男性に対する女性の不平等要素をなくし女性の福祉を拡充させることに重点を置いている」とする韓国の女性政策を紹介している。日本についてのものは張(張, 2007: 223-251)が「日本の男女共同参画政策の性格及び展開に関する研究-家庭と就業の両立支援政策を中心として-」において、日本の男女共同参画社会の政策が単なる宣言性の強い理念法に止まっているという指摘をしている。社会意識の面からは竹ノ下外1名(竹ノ下, 2005: 39-61)の「性役割意識の規定要因に関する国際比較-日本と韓国との比較から」がある。日韓両国において、まだまだ性別分業は意識の次元においても強固に存続しており、性役割意識変革に向けた政策的な働きかけが肝要であると

結論付けている。教育の視点からは、日野（日野、2008：167-186）の「ジェンダーの視点で考える男女平等教育の課題と可能性」の中で、小学校の性別意識を問う「自分らしさ」という授業実践を通し、画一的な価値観の押し付けを排する取り組みを紹介している。又、大脇（大脇、1992：211-241）は「教科書における男女平等の必要性」において、教科書がいまだ伝統的な性別役割分担意識を土台にして著されているとし、多様な男女の生き方を描く必要性を説いている。同様なものに渡部（渡部、2006：95-107）の「日本語教材とジェンダー」があるが、ここでは日本語教科書に含まれた性差別的な描写や記述を紹介するとともに、日本語教師の潜在的な性差別意識も問題としている。

これら先行研究は本稿が論を進めるに当たり、情報の分析及び実態の把握上、有効な示唆や論拠を与えてくれるが、しかし何れも家庭での子どもや保護者の実際の様相が見えづらい。特に親の家事への参与度に関する資料は幾つか得られるが、子どもについてのそれは調査報告が待たれる。

3 調査分析

3.1 調査の概要

本稿は高校生の家庭での家事分担についての様相を調査するに当り、ソウル及びその近郊の4校の高校生（全員2年生）及びその保護者に対し、調査用紙を各々400部配布した。データ分析にあたっては各調査項目別にその集団のバラツキ具合を示す散布度として標準偏差、そして類似性の度合いを見るために相関係数を求めた。

<表1. 調査の方法>

区 分	学 生	保護者
調査用紙配布数	400部	400部
有効回収数	374部 (93.5%)	351部 (87.8%)
調査対象者数	374人	351人
調査期間	09年11月配布、10年01月回収終了	
データ分析	標準偏差・相関係数	

<表2. 高校生被験者数>

被験者	男子	女子	計
A女子高校生	—	50人	50人
B男子高校生	49人	—	49人
C共学高校生	—	50人	50人
D共学高校生	108人	117人	225人
計	157人	217人	374人

<表3. 保護者被験者数>

被験者	計
保護者	351人
計	351人

3.2 調査分析

本稿の基本データとなる「男女の役割に関する設問調査」は、学生用と保護者用に分けて質問した。先ず、学生のお手伝いをしているか否かの全体像から見てみると、〈表4〉にあるように男子学生より女子学生に「お手伝い可否」のバラツキがやや高いが、約7割強の男女が家事を分担している。この点は、保護者の息子、娘への家事をさせているか否かの回答を見ると、同じく約7割強の家庭で子供たちはお手伝いをしていることになり、学生の回答と数値的には見事に符合している。

〈表4. 学生に対する基礎統計量〉

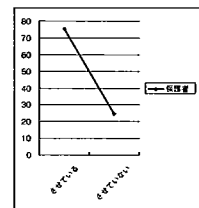
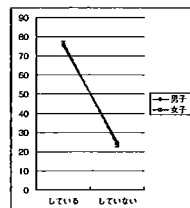
学生用質問項目	
I 「お手伝いをしている」	
①	お伝いはいつから始めましたか。
②	お手伝いの頻度はどの程度ですか。
③	お手伝いは何をしていますか。
④	お手伝いを始めた動機は何ですか。
⑤	お手伝いをしていることについてどう思いますか。
II 「お手伝いをしていない」	
①	お手伝いをしていない理由は何ですか。
②	お手伝いを今後する予定がありますか。

区 分	学 生	
	男 子	女 子
被験者	157人	217人
お手伝い している	118人 (75.2%)	167人 (77.0%)
していない	39人 (24.8%)	50人 (23.0%)
計	157人 (100.0%)	217人 (100.0%)
標準偏差	$\sigma=39.5$	$\sigma=58.5$
相関係数	$r=1$	

〈表5. 保護者に対する基礎統計量〉

保護者用質問項目	
I 「お手伝いをさせている」	
①	お手伝いはいつからさせていますか。
②	お手伝いをさせている頻度はどの程度ですか。
③	お手伝いは何をさせていますか。
④	お手伝いをどうしてさせていますか。
II 「お手伝いをさせていない」	
①	お手伝いをさせていない理由は何ですか。
②	お手伝いを今後させる予定がありますか。
III 「父親はお手伝いをしていますか」	

区 分	保護者
被験者	351人
お手伝い させている	265人 (75.5%)
させていない	86人 (24.5%)
計	351人 (100.0%)
標準偏差	$\sigma=89.5$



次に家事分担の状況を、学生の回答と保護者の回答を照らし合わせながら、詳しく見ていくことにする。

<表 6. 各質問項目に対する基礎統計値>

区 分	男子	女子
被験者数	157人	217人
お手伝い（いつから）範囲（幼・初・中・高）		
標準偏差	$\sigma=20.1$	$\sigma=31.7$
相関係数	$r=0.99$	
お手伝い（頻度）範囲（毎日・時々・たまに・休日に・その他）		
標準偏差	$\sigma=18.6$	$\sigma=24.9$
相関係数	$r=0.94$	
お手伝い（何を）＜複数回答＞範囲（料理・洗濯・整頓・掃除・その他）		
標準偏差	$\sigma=29.3$	$\sigma=43.1$
相関係数	$r=0.96$	
お手伝い（動機）＜複数回答＞範囲（自分から・親の要求・友だちから・理由なく・その他）		
標準偏差	$\sigma=23.2$	$\sigma=35.1$
相関係数	$r=0.90$	
お手伝い（意識）＜複数回答＞範囲（当然・仕方なく・勉強に支障・面倒・楽しい・恥しい・その他）		
標準偏差	$\sigma=27.7$	$\sigma=36.9$
相関係数	$r=0.99$	
お手伝い（しない）＜複数回答＞範囲（勉強に支障・しなくて良い・支障になる・親の意向・その他）		
標準偏差	$\sigma=6.3$	$\sigma=10.0$
相関係数	$r=0.99$	
お手伝い（する予定）範囲（ある・なし）		
標準偏差	$\sigma=5.5$	$\sigma=12$
相関係数	$r=1$	

<表 7. 保護者の各質問項目に対する基礎統計値>

区 分	息子の親	娘の親
被験者数	351人	
お手伝い（いつから）＜重複回答＞範囲（幼・初・中・高）		
標準偏差	$\sigma=30.7$	$\sigma=37.8$
相関係数	$r=0.99$	
お手伝い（頻度）＜重複回答＞範囲（毎日・時々・たまに・休日に・その他）		
標準偏差	$\sigma=28.0$	$\sigma=31.1$
相関係数	$r=0.98$	
お手伝い（何を）＜複数回答＞範囲（料理・洗濯・整頓・掃除・その他）		
標準偏差	$\sigma=46.3$	$\sigma=45.7$
相関係数	$r=0.97$	
お手伝い（どうして）＜複数回答＞範囲（子供から・親の願望・助けになる・その他）		
標準偏差	$\sigma=18.9$	$\sigma=25.3$
相関係数	$r=0.99$	
お手伝い（させていない理由）＜複数回答＞範囲（勉強に支障・させてはだめ・むしろ支障・可哀相・その他）		
標準偏差	$\sigma=6.2$	$\sigma=13.9$
相関係数	$r=0.96$	
お手伝い（させる予定）範囲（ある・なし）		
標準偏差	$\sigma=2$	$\sigma=2.5$
相関係数	$r=1$	

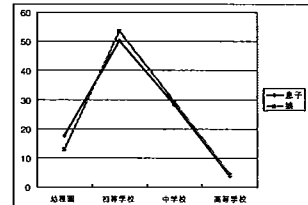
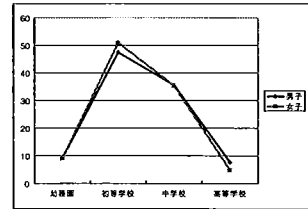
3.2.1 「お手伝いはいつから始めましたか」

<表 8. いつから>

いつから	男子	女子
幼稚園	11人 (9.3%)	15人 (9.0%)
初等学校	56人 (47.5%)	85人 (50.9%)
中学校	42人 (35.6%)	59人 (35.3%)
高等学校	9人 (7.6%)	8人 (4.8%)
計	118人 (100.0%)	167人 (100.0%)

いつから	男子保護者	女子保護者
幼稚園	32人 (17.7%)	26人 (12.9%)
初等学校	91人 (50.3%)	108人 (53.5%)
中学校	51人 (28.2%)	59人 (29.2%)
高等学校	7人 (3.8%)	9人 (4.4%)
計	181人 (100.0%)	202人 (100.0%)

※重複回答



<表 8>から窺えるように、男子より女子にお手伝いの開始時期のバラツキがやや高めであるが、男女ともに初等学校から中学校にかけて家事を始めている。又、男女の推移にはほぼ同様な曲線を描いているように、両者に強い相関が読み取れる。保護者の回答でも男子を持つ保護者と女子を持つ保護者とでは強い相関性があり、学生の場合と似た曲線を描いているが、ここでは幼稚園から初等学校にかけて家事をさせたとする回答に、女子よりは男子にやや早めの対応を見せている。尚、集計に 32 名の重複があるが、これは一保護者に二名の高校生がいる理由による。

3.2.2 「お手伝いの頻度はどの程度ですか」

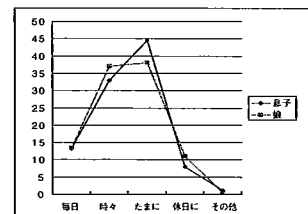
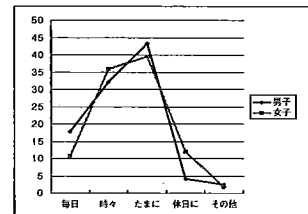
男女ともに毎日お手伝いをしている者は 2 割以下であり、多くは「たまに・時々」行っている。男女の頻度推移に多少のバラツキが見え、特に女子の「休日」に行うとする割合が、男子のそれより高めである。「その他」では、男子では「休暇中」と記し、女子では「両親が出かけた時、手が空いた時、その気になった時」を挙げている。保護者の回答でも男

<表 9. 頻度>

頻度	男子	女子
毎日	21人 (17.8%)	18人 (10.8%)
時々	38人 (32.2%)	60人 (35.9%)
たまに	51人 (43.2%)	66人 (39.5%)
休日に	5人 (4.2%)	20人 (12.0%)
その他	3人 (2.5%)	3人 (1.8%)
計	118人 (100.0%)	167人 (100.0%)

頻度	男子保護者	女子保護者
毎日	23人 (13.3%)	28人 (13.5%)
時々	57人 (32.9%)	77人 (37.0%)
たまに	77人 (44.5%)	79人 (38.0%)
休日に	14人 (8.1%)	23人 (11.1%)
その他	2人 (1.2%)	1人 (0.4%)
計	173人 (100.0%)	208人 (100.0%)

※重複回答



子を持つ保護者と女子を持つ保護者とでは、学生の場合と似た曲線を描いているが、「毎日」行わせているとする回答にはほぼ一致点を見せている。尚、集計に 30 名の重複があるが、これは頻度に複数回答したことによる。

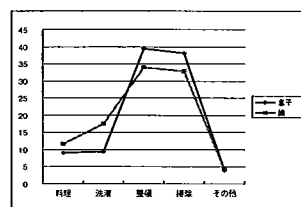
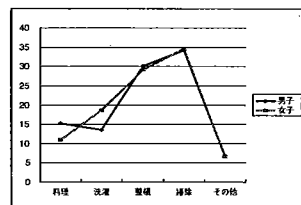
3. 2. 3 「お手伝いは何をしていますか」

＜表 10. 何を＞

何を	男子	女子	何を	男子保護者	女子保護者
料理	43人 (15.3%)	45人 (11.0%)	料理	27人 (9.0%)	45人 (11.6%)
洗濯	38人 (13.5%)	76人 (18.6%)	洗濯	28人 (9.4%)	68人 (17.5%)
整頓	85人 (30.2%)	119人 (29.2%)	整頓	118人 (39.5%)	132人 (33.9%)
掃除	96人 (34.2%)	141人 (34.6%)	掃除	114人 (38.1%)	128人 (32.9%)
その他	19人 (6.8%)	27人 (6.6%)	その他	12人 (4.0%)	16人 (4.1%)
計	281人 (100.0%)	408人 (100.0%)	計	299人 (100.0%)	389人 (100.0%)

※複数回答

※複数回答



男女ともに掃除・整頓が多く、料理は男子、洗濯は女子がしている傾向にあるが、保護者の回答では料理、洗濯とも娘にやらせている割合が比較的高く、その分、掃除・整頓が若干落ちている。「その他」では、男子は「皿洗、お使い、したい時」、女子では「皿洗い、荷物持ち、煮物をしている時」とあり、保護者の回答では、息子には「お使い、皿洗い」、娘には「皿洗い、食事準備、荷物持ち」をさせている。

3. 2. 4 「お手伝いを始めた動機は何ですか」

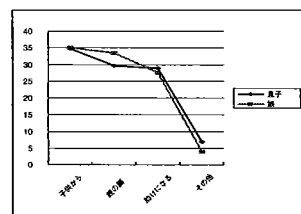
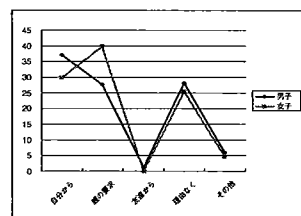
動機に対する男女の相関係数が他の質問項目に比して落ちているのは、男子では「自分

＜表 11. 動機＞

動機	男子	女子	動機	男子保護者	女子保護者
自分から	62人 (37.1%)	69人 (29.9%)	子供から	61人 (34.7%)	71人 (35.0%)
親の要求	46人 (27.6%)	92人 (39.8%)	親の願望	52人 (29.6%)	68人 (33.5%)
友だちから	2人 (1.2%)	0人 (0.0%)	助けになる	51人 (28.9%)	56人 (27.6%)
理由なく	47人 (28.1%)	59人 (25.5%)	その他	12人 (6.8%)	8人 (3.9%)
その他	10人 (6.0%)	11人 (4.8%)	計	176人 (100.0%)	203人 (100.0%)
計	167人 (100.0%)	231人 (100.0%)			

※複数回答

※複数回答



から」、女子では「親の要求」が一番高い点にある。又、娘を持つ保護者の回答では「親の願望」が比較的高いところから、親の娘に対する期待感が窺える。「その他」では、男子では「親が忙しい、親が体罰、つまらないから」、女子では「特に考えなく、役割分担だから、当然だ」とする回答がある。保護者による「その他」の息子を持つ保護者からは「面倒だ、子供の部屋は子供で」、娘を持つ保護者からは「疲れる、助けになる」と答えている。

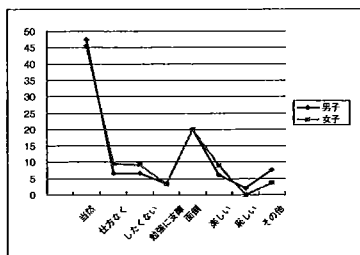
3.2.5 「お手伝いをしていることについてどう思いますか」

＜表 12. 意識＞

意識	男子	女子
当然	93人 (47.4%)	123人 (45.4%)
仕方なく	13人 (6.6%)	26人 (9.6%)
したくない	13人 (6.6%)	25人 (9.2%)
勉強に支障	7人 (3.6%)	9人 (3.3%)
面倒	39人 (20.0%)	54人 (19.9%)
楽しい	12人 (6.1%)	24人 (8.9%)
恥しい	4人 (2.0%)	0人 (0.0%)
その他	15人 (7.7%)	10人 (3.7%)
計	196人 (100.0%)	271人 (100.0%)

する	男子	女子
肯定的	105人 (53.6%)	147人 (54.2%)
否定的	76人 (38.8%)	114人 (42.1%)
その他	15人 (7.6%)	10人 (3.7%)
計	196人 (100.0%)	271人 (100.0%)

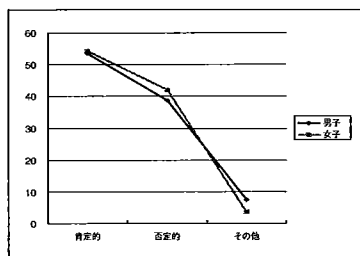
※複数回答



お手伝いをしていることに対する意識や気持ちは、男女ともに当然だとする回答が4割強ある反面、面倒だとするもの

も少なくない。又、勉強に支障になるという回答が低い、この点は後で触れる保護者のお手伝いをさせていない最大の理由が「勉強に支障になる」という答えのため、学生と保護者に大きな違いを見せている。「その他」では、男子では「親が忙しいから、手伝いたいから」というのがあり、女子では「親に言われるとしたくない、とても嫌だ、ただやっている」という否定的な回答が目立つ。

これらの項目から肯定的、否定的な面に分けてみる



と、男女ともにほぼ同じような曲線であるが、若干、女子に否定的な傾向が窺える。

次にお手伝いをし

ていない場合を見ることにする。

3.2.6 「お手伝いをしていない理由は何ですか」

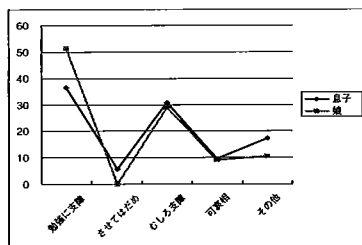
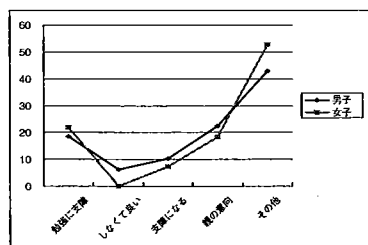
男女ともに「その他」が多いが、男子の場合は「面倒だ、嫌だ、時間がない、勉強に専念しろと言われた、姉がしている」というものであり、女子の場合は「面倒だ、したくない、しろと言わない、時間がない、嫌いだ」と答えている。＜表 13＞での「しなくて良い・

支障になる」という意味は、「子供は自らしなくても良い、するとかえって親に支障になる」という意味であり、「親の意向」とは、「親からお手伝いをしなくてもよいと言われた」という意味である。保護者の考えでは勉強に支障になるとする回答が多いが、子供たちの考えでは「しなくてもよいと言われた、したくないから」という理由のようである。保護者が回答する「その他」には、男子の親では「特にさせない、しないから、時間がない」、女子の親では「特にさせる理由がない、しないから、嫌がる、疲れるだろうから」と答えている。又、お手伝いさせることを「可哀相」だと答えた保護者も1割弱いる。

<表 13. 理由>

理由	男子	女子	理由	男子保護者	女子保護者
勉強に支障	9人 (18.4%)	12人 (21.8%)	勉強に支障	19人 (36.5%)	39人 (51.3%)
しなくて 良い	3人 (6.1%)	0人 (0.0%)	させては いけない	3人 (5.8%)	0人 (0.0%)
支障になる	5人 (10.2%)	4人 (7.2%)	むしろ支障	16人 (30.8%)	22人 (29.0%)
親の意向	11人 (22.4%)	10人 (18.2%)	可哀相	5人 (9.6%)	7人 (9.2%)
その他	21人 (42.9%)	29人 (52.8%)	その他	9人 (17.3%)	8人 (10.5%)
計	49人 (100.0%)	55人 (100.0%)	計	52人 (100.0%)	76人 (100.0%)

※複数回答

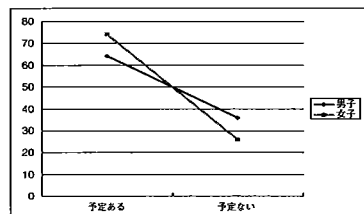


3. 2. 7 「お手伝いを今後する予定がありますか」

男子より女子に今後お手伝いをする予定があると答え、その時期も卒業後にあると答えた女子が男子を若干上回っている。具体的には、男子の場合は「一人暮らしになったら、そういう機会になったら」、女子の場合は「結婚後、大学生になったら、一人暮らしになったら、時間があったら」と答えている。保護者の回答では男女の保護者とも、ほぼ同様に

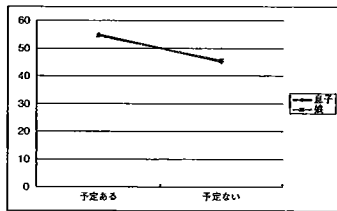
<表 14. する予定>

する予定	男子		女子	
ある	25人 (64.1%)		37人 (74.0%)	
	卒業後	その他	卒業後	その他
	16人 (64.0%)	9人 (36.0%)	28人 (75.7%)	9人 (24.3%)
ない	14人 (35.9%)		13人 (26.0%)	
計	39人 (100.0%)		50人 (100.0%)	



予定のあるなしを二分させている。

させる予定	男子保護者	女子保護者
ある	23人 (54.8%)	30人 (54.5%)
ない	19人 (45.2%)	25人 (45.5%)
計	42人 (100.0%)	55人 (100.0%)

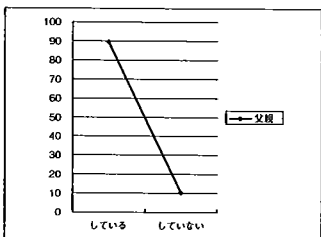


3. 2. 8 「父親はお手伝いをしていますか」

<表 15>によると、父親が家事の手伝いをしているとする割合は90%に近い。竹ノ下外1名(竹ノ下, 2005: 47)の性役割意識調査では、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」という質問において、「賛成・どちらかといえば賛成」を含めると、韓国の男性は54.0%、女性は50.9%という結果を示しており、賛成・反対が男女ともにほぼ半数であるため、本調査結果の90%弱は、かなり高めであるといえる。

<表 15. 父親に対する基礎統計値>

区 分	保 護 者
被験者 (父親)	265人
お手伝い している	238人 (89.8%)
していない	27人 (10.2%)
計	265人 (100.0%)
標準偏差	$\sigma=105.5$



<表 16. 父親の各質問項目に対する基礎統計値>

区 分	保護者 (父親)
被験者数	265人
お手伝い (頻度) 範囲 (毎日・時々・たまに・休日に・その他) 標準偏差	$\sigma=29.4$
お手伝い (何を) <複数回答> 範囲 (料理・洗濯・整頓・掃除・その他) 標準偏差	$\sigma=42.8$

<表 17. 主として妻の役割国際比較>

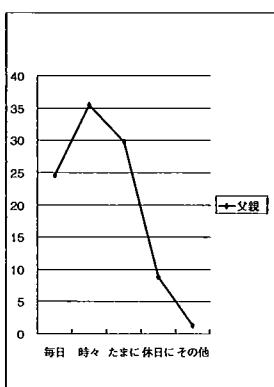
区分	掃除・洗濯	食事準備	買い物	家計管理	近所付き合い	平均
韓国	86.4%	92.8%	79.4%	76.9%	46.6%	76.4%
日本	76.8%	76.3%	67.6%	67.2%	41.4%	65.9%
米国	52.7%	52.2%	48.8%	30.4%	13.7%	39.6%

しかし、1995年に発表された日本の総務庁(当時)の「子供と家族に関する国際比較調査報告書」(総務庁, 1995: 166)の「主として妻の役割国際比較」によると、韓国、日本、米国の3カ国の夫婦の役割分担について、「主として妻の役割」とする回答がどの国よりも韓国が76.4%で高く、「主として夫の役割」とする仕事では掃除・洗濯の0.3%を最低に、一番高くても家計管理の6.1%であった。このように家事の負担が妻に大きく偏り、妻の仕事とする性別役割分担が極めて強いことが分かるが、この調査から10年経た2005年の「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方の5か国調査(国立女性教育会館, 2009: 180)においても、韓国の女性は44.4%、男性は52.6%が賛成としているので、今回の調査で得られた90%近い「お手伝いをしている」とする結果は異常な高めであるといえよう。お手伝いの頻度では<表 18>にあるように「時々・たまに」が高く、その

他には「特別な時があったとき」を挙げている。尚、「毎日」と「時々」を含めると60%ほどの数値になるので、前述（国立女性教育会館,2009:180）の結果と相似してくる⁽⁷⁾。

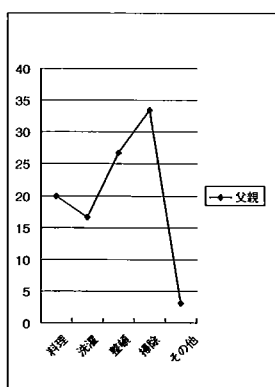
<表 18. 頻度>

頻度	父親
毎日	56人 (24.6%)
時々	81人 (35.5%)
たまに	68人 (29.8%)
休日に	20人 (8.8%)
その他	3人 (1.3%)
計	228人 (100.0%)



<表 19. 何を>

何を	父親
料理	83人 (19.9%)
洗濯	70人 (16.7%)
整頓	112人 (26.8%)
掃除	140人 (33.5%)
その他	13人 (3.1%)
計	418人 (100.0%)



※複数回答

又、どんなお手伝いをしているのかという点では「掃除・整頓」が高いが、この点は息子、娘の実態と傾向を一にしている。「その他」には、「皿洗い、ごみ捨て、大工、子守り、肉焼き」が挙げられている。

以上、男女の高校生計 374 人とその保護者 351 人について、家庭での家事手伝いの様相について調査したところ、男女共に 7 割強の高校生が何らかのお手伝いをしており、又、保護者の回答でも同様に 7 割強の親が、初等学校から中学校にかけてお手伝いをさせていることが分かった。一方、父親のお手伝いの様相についても約 9 割が家事を行っている。これらから類推するならば、概ね家庭では家族共々、伝統的な「男は仕事、女は家事」という性の役割意識とは違った協同的な意識化の方向性が窺える。

しかし、集計された数値は高い値を示しているが、お手伝いの実態を見ると、高校生たちはお手伝いをすることに「当然」だとする意識を持ちながらも、その内実は「たまに・時々」行うことが多く、身の回りの「整頓・掃除」に比重が置かれ、父親についても高校生同様、「時々・たまに」であり、「掃除・整頓」などを行っている模様である。

4. まとめ

韓国の高校生は大学などの受験を控え、とても忙しいといわれている。2008 年の調査（日本青少年研究所, 2009:35-36）では、学校での勉強時間が日本の場合は 5～6 時間未満が 38.9% で最も高く、韓国の場合は 11 時間以上の 30.7% が一番高い。因みに日本の場合の 11 時間以上は 0.0% である。家での勉強時間は、日本は 2～2 時間半未満の 21.9% が最も高く、韓国の場合は 1～1 時間半の 26.6% が一番高いが、1 日の総勉強時間は、12 時間もの高校生が 3 割程いることになろう。このような状況下での家庭でのお手伝いは到底望めそうもないと思われるが、教育現場での『市民倫理』の授業では「両性平等」

の理念の下での家事分担に性差を持ち込まない指導がなされ、日本語教科書では第6次から第7次に至り、家庭での家事分担に関する記述及び描写場面が増えている。

本稿は、韓国の日本語教科書に見られる高校生の家事分担の記述及び描写が、実際の家庭においてどのように反映され、お手伝いとして実践されているのかを検証する意味で、高校生及びその保護者に家庭での実態を調査した。その結果、高校生の男女共、7割方が何らかのお手伝いをしていることが分かり、日本語教科書での家事分担の記述及び描写が、一定程度調査に反映された可能性を見、男女の性役割意識の高さが窺われた。又、父親の家事参与率の9割近い高さは、他の調査資料で見た結果とはだいぶ様相が違っている。特に娘、息子よりも高い数値は、父親のお手伝いに対する積極的な姿勢が窺い知れた。

しかし、このような調査結果をそのまま受け止めるならば、男女の平等意識を推進する韓国政府の意向に沿った望ましい方向にあるともいえようが、子供たちの家庭外で占める勉強時間を鑑みると、家庭でのお手伝いの実行はかなりの負担と思われる。そのことがお手伝いの頻度では「たまに・時々」が比較的高く、内容的には身の回りの「整頓・掃除」に偏っている点に現れている。又、保護者にあつては子供たちの「勉強に支障」の恐れを危惧しながらも、初等・中学の早い段階からお手伝いをさせ始めている点からも窺い知れよう。

本調査はソウル及びその近郊の高校生及び親に対してのものであり、地方の場合はまた様相が違って来るかもしれないが、何れにしても高校生及び保護者の家庭での実態は、その国の社会構造を反映しているし、男女平等意識のレベルが推し量れよう。

注

- (1) 「家庭崩壊」については、韓国においても、「韓国では、“認知・意思疎通因子”の因子得点が低く、“軋轢・反発の因子”のそれが高い。親子間におけるコミュニケーションや理解が足りなく、親に対して反抗心や反発をもちやすい」という調査報告がある。(日本青少年研究所, 2009: 58)
- (2) 「平成19年度中に児童相談所が対応した養護相談のうち『児童虐待相談の対応件数』は40,639件で、前年度に比べ3,316件(前年度比8.9%)増加している」(社会福祉行政業務報告, 2009: 9) これは統計を取り始めた平成2年度(1,101件)に比して約37倍の増加である。
- (3) 原文を記す。『시민 윤리』(2009. 7 월, p.109) 「가정에서는 남편과 아내의 시간이 동등한 가치를 지닌다는 인식을 바탕으로 남자도 기꺼이 가사를 분담해 야 한다」
- (4) 『학교내 성차별 실태조사 및 남녀평등 의식 고취 방안』교육부, 1998. 연구책임자; 정해숙. これは1998年12月に、初・中学校の性差別的教育活動の実態と原因を、アンケート調査に基づき考察した、政策立案のための報告書である。
- (5) 韓国では金泳三政権時の1995年まで、初等教育の6年間を「国民学校」と呼称したが、日本の植民地時代の残骸であるとし、解放50年を機に翌年の1996年3月(韓国の新学期は3月)から「初等学校」という名称に変わり、現在に至っている。
- (6) 韓国の有力紙「朝鮮日報」の記事より引用。http://sakura4987.exblog.jp/5720752/
- (7) 日本人男性に対する調査では、50歳代では約4割、20歳代でも約2割が全く家事をせず、妻任せとなっている現状が報告されている。(第3回全国家庭動向調査, 2006: 9)

<参考文献>

<人文・社会科学>

- 張和卿 (2007) 「日本の 남녀공동참획정책의 성격 및 전개에 관한 연구-가정과 취업 양립지원정책을 중심으로-」 『日本学研究』 第20輯 檀国大学校日本研究所 pp.223-251
- 井上恵美子 (2008) 「教育基本法改訂のその後-家庭教育政策をめぐって」 『女性白書2008』 日本婦人団体連合会, ほるぷ出版 p.148
- 大脇雅子 (1992) 「教科書における男女平等の必要性」 『教科書の中の男女差別』 明石書店 pp.211-241
- 白井京 (2006) 「女性と仕事ジャーナル15号」 女性と仕事研究所 pp.50-69
- 竹ノ下弘久, 西村純子 (2005) 「現代日本の社会意識-家族・子ども・ジェンダー」 慶応大学出版会 pp.39-61 p.47
- 日野玲子 (2008) 「ジェンダーの視点で考える男女平等教育の課題と可能性」 『ジェンダーで考える教育の現在』 解放出版社 pp.167-186
- 平本孝典 (2009) 「高校日本語教科書に見られる男女の描かれ方」 『日語日文学研究』 第71輯1巻 韓国日語日文学会 pp.355-374
- 渡部孝子 (2006) 「日本語とジェンダー」 ひつじ書房 pp.95-107
- J・J・ルソー (1762) 『社会契約論』 (1954, 桑原武夫他1名訳) 岩波書店 p.16
- <調査報告書・教科書・インターネット資料引用>
- 『학교내 성차별 실태조사 및 남녀평등 의식 고취 방안』 (1998), 교육부, 연구책임자: 정해숙, p. v
- 『子供と家族に関する国際比較調査報告書』 (1995) 総務庁青少年対策本部 p.166
- 『第3回全国家庭動向調査結果の概要』 (2006) 国立社会保障・人口問題研究所 p.9
- 『男女共同参画統計データブック-日本の女性と男性-2009』 (2009) 独立行政法人国立女性教育会館 p.180
- 『社会福祉行政業務報告平成19年度』 (2009) 「平成19年度社会福祉行政業務報告(福祉行政報告例)結果の概況」 厚生労働省大臣官房統計情報部 厚生統計協会 p.9
- 『中学生・高校生の生活と意識調査報告書-日本・米国・中国・韓国の比較-』 (2009) 財団法人日本青少年研究所 pp.35-36 p.58
- 韓国高等学校教科書『市民倫理』 2009.7刷 志学社 p.109
- 『朝鮮日報』, <http://sakura4987.exblog.jp/5720752/>

Survey on South Korean High School Students and their parents' Gender Role Consciousness — Analysis through Japanese Textbooks —

Takanori HIRAKI

*Division of International Center
Kurashiki University of science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan
(Received October 1, 2011)*

Hiraki (2009) analyzed a gender role consciousness shown in Korean high school Japanese language textbooks of sixth and seventh version.

This paper reanalyzes a gender role consciousness at a home based on the abovementioned research result. A total of twenty four text books of sixth and seventh version had shown typical traditional gender role consciousness. This conventional thinking was almost unchanged both in sixth and seventh version.

However, we can see parents' a little consciousness change about male students' role, while daughter's sex role at a home was almost unchanged. Description about male students' housework role had drastically increased than before. But, this progressive trend may be seen only in the textbooks. In order to understand an actual condition, I sent out questionnaire to a total of 725 students and their parents who are living in Seoul and its suburbs.

The research revealed that about 70% of male and female high school students help housework. We can see fair consciousness of sex assignment. This research also revealed that about 90% of father help housework. Fathers' involvement rate is highly different from other researches' result which pointed out father's low involvement. It seems that fathers have positive attitude to help housework. If this positive research result reflects an actual condition, we can say that the Korean government's policy to promote fair consciousness of sex assignment goes well. Helping housework may be a big burden for high school students, because they are forced to study long hours outside. Their answers are mostly such as "I help occasionally" or "I keep myself neat and tidy" Their above answers seem students' actual conditions. Parents are trying to let children help housework from the early stage of elementary school or junior

high school. Obviously, parents seem to think that children's helping may reduce their study hours.

As mentioned, this research was carried out in Seoul and its suburbs, therefore other local area may show different results. Students and parents' actual condition at home reflects a nation's social structure. The level of sexual equality consciousness can be presumed from there.